
とある未来の都市戦争

かみやん！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある未来の都市戦争

【Nコード】

N9017K

【作者名】

かみちゃん！

【あらすじ】

学園都市で能力者による、能力者狩りがおこなわれていた。

能力者狩りの犯人は、能力を複数使えるらしい。

そして、過去未来を自由に行き来する少年。

未来の学園都市はいつたい・・・

過去と未来が交差するとき、能力者達の物語が始まる。

とある小説の人物紹介（前書き）

一応キャラ設定を載せときます。

編集する予定は100パーなんでよろしく！

とある小説の人物紹介

登場人物

- ・ 上条 当麻かみじょう とうま

能力 幻想殺し（イマジンプレイカー）

- ・ 禁書目録（インデックス）

能力 絶対記憶能力

- ・ 御坂 美琴みさか みこと

能力 エレクトロマスター

超電磁砲レベル5第三位。
レベルガン

- ・ 白井 黒子しらい くろこ

能力 空間移動レベル4
テレポート

- ・ 村谷 变時<オリキャラ>
むらたに へんじ

能力 時空間制御 レベル不明

- ・ 一方通行（アクセラレータ）

能力 アクセラレータ（ベクトル操作）レベル5第一位

・秋野 みさき（あきの みさき）＜オリキャラ＞

能力 エンパス レベル -

・木原 きはら 多才 たさい＜オリキャラ＞

能力 吸収 レベル -

・かみちゃん！（かみちゃん）＜オリキャラ＞

能力 かみちゃん！ノチカラ レベル -

・水谷 みずたに 盛時 せいじ＜オリキャラ＞

能力 無能力者 レベル0

・マリ（まり）＜オリキャラ＞

能力 不明

・angel エンジェル・バースト burst＜オリキャラ＞

能力 絶対領域

まだ決まったわけではありません。仮設定です。

用語集

・学園都市

東京都・神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。広さは東京都の約3分の1。総人口は230万人でその内8割は学生が占める。外部と隔離された巨大都市に超能力開発を始めとする、最先端の科学技術が研究・運用されており、都市の外と内では数十年以上の技術格差が存在するという。実際に、他国の核攻撃を水際で防ぎ、かつ学園都市内外の人間にその攻撃が行われた事自体を気付かせないレベルの科学力を誇る。

・第三都市

大阪府・奈良県・和歌山県に跨る円形の都市。学園都市をモデルにした都市で、面積は学園都市の2分の1で、人口は110万人で、学園都市みたいに学生が人口の8割を占めているとかはない。学芸都市・学園都市とは、完全に敵対状態である。科学の差は、学園都市とあまり変わらない。第三都市が存在する意味は、学園都市にある。

・多重能力者計画デュアルスキルけいかく

学園都市の実験では、多重能力は実現不可能とされている能力で、実験は中止されていた。だが、第三都市の統括理事長である木原多才は、この計画をもう実行した。結果は失敗に終わったが、実験結果からは、注射器を利用した誰でも能力が手に入る、新しい能力開発プログラムを開発した。

・チーム（スキル）

学園都市から脱走した能力開発組織。アレイスター暗殺計画を考えている。

外（学園都市の）の科学組織<科学結社>と手をくみ、新能力開発都市製作プロジェクトを実行する。

・マリッド6 マリッド・シックス 護衛部隊

（スキル）の護衛部隊。5万人の中から選ばれたプロの集まりで、戦闘能力は普通じゃない。

スキルのメンバーが、学園都市から脱走するときに、マリッド6が護衛をし、脱走に成功する。

対アクセラレータの体術を磨き上げているリーダー・マリに続き、NFJ-047（能力を一時的に封じる銃）や、キャパシティーダウン・マイクロ（高い音が鳴る道具。普通の人にはただの甲高い音に聞こえるが、能力者には効果的）を使いこなす。

マリッド6は殺しは基本的にはしない。敵にばれずに進入する『潜入』を得意とする部隊である。

とある小説の人物紹介（後書き）

一応今考えているキャラです。

能力者狩り（前書き）

国語力ゼロの自分ですが、オリストを書いてみたいとおもいます。
変なストーリーになるのは確実なので、覚悟してください！
つてか、まだどういふふうになるかはわかりませんがw
見てくれたらありがたいですw

連載バージョンです

能力者狩り

白井黒子は、第7学区の街中を歩いている。

ジャッジメントの仕事をしているのだろうか、緑のワッペンを腕につけている。

その時、白井の携帯がなった。

白井は、めんどくさそうな顔をして通話にでた。

「はい。なんですかこのり先輩？」

『ちょっと、きいてきいてっ！』

電話してきたのは、白井の先輩で、ジャッジメントでも

尊敬できる存在のこのり先輩である。

『最近、能力者による能力者がりが多発してるでしょ？』

「ええ。それがなんですの？」

このり先輩は少し黙って言った。

『あいては、能力を複数使ってるらしいの。』

多重能力者って言えばいいかしら…』

「はっ？多重能力者・・・ですの？」

白井は、このり先輩が言ったことがしばらく理解できなかった。

それはそのとおりだ。

学園都市には、たくさんの能力者がいる。

電気を操る者や、火を操る者、空間移動する者などたくさんの能力者が。

でも、それらを見て驚く人は学園都市にはいない。

それが学園都市の日常だからだ。

だが多重能力者となればまた別だ。

能力は一人にひとつ。

多重能力は、実現不可能となっているからだ。

（レベルアップ）幻想御手事件で木山春生が多重能力を実現させてましたけど・・・

レベルアップ
幻想御手事件。

過去、幻想御手を利用したネットワークを操る事で木山春生という人物が

多重能力を実現させていた。

しばらく白井はそんなことを考えていたが、このり先輩が追い討ちをかけるように言った。

「それと被害者が言うには、能力をコピーされたとか
いつてたのよ」

能力者狩り（後書き）

見てくれてありがとうございます。

書こうと思ったきっかけは、いろいろありまして^^

ひとつだけいうと、やっぱりとある魔術の禁書目録を読んだからなんですネ！

実はいうと、自分、能力とかそういうのが大好きなんですww

なので、文とかそういうのを書く才能がなくても、ある程度かけるんですネ。

魔術は苦手ですが・・・

いつか、かけるようになりたい！

たぶんですネ。

過去の自分がですね、今の自分を見たら

こう思うでしょう。

（明日雨降るね。いや、台風が来るかな？）

とかねwww

まあ、とにかくそういうことです。

じゃあ、1111で<>

ではじゃあ

エンパス。(前書き)

とりま、連載にこれから書いていきたいと思ったので、のせます。

短編の方の『エンパス』と、内容は同じです。

初めて読む人は、お手柔らかにw

楽しんで読んでいただければ幸いです。

エンパス。

とあるゲームセンターから出てくる少年がいた。

（あーあ。どうしたらあれからコンボにもっていけるのかなあ・・・）

少年の名前は中村青次。

格ゲー大好き高校生である。

能力は衝撃拡散で、ショックアップソーパーレベルは3。

まあまあレベルは高い。

普段は、この街もいろいろにぎやかだが

最終下校時刻を過ぎているため、人がほとんど出歩いていない。

学園都市は、人口の8割が学生なので

夜の街に人が少ないのは不自然じゃない。

今で歩いている学生は、先生からの説教覚悟してるぜ！

的なグループである。

中村青次はその中の一人であるのだろう。

そんな彼が歩いてるときに、頭の中で少女の音が響いた。

『君はあ、シヨックアブソーバーでいいんだよねえ？』

青次は慌てて回りを見渡したが、誰もいない。

「テレパスか？」

青次がそうつぶやいたとき

後ろからはつきりと声が聞こえた。

「せーかいッ！よくわかったねえ」

振り向いたら、そこには中学生ぐらいの少女が立っていた。

背の高さは150cmぐらいだろう。

服装はすべて白で統一されている。

（何でだ？さっきは誰もいなかったのにッ！レポートでも使ったのか？）

いや、さっきテレパス使ってたしありえないっ。能力は、一人にひとつだしッ！（）

「うん、そうだね、正解だよ。レポート使ったよ。」

（頭の中をのぞかれた？）

「お前は何者なんだ？なぜ能力を複数使えるんだッ！？」

わけわからなくなった青次は、少女に向かって大きな声で叫んだ。

「お前は何者かっですか？そうだねえ、簡単に言えば未来から来た能力者さ。

それ以上は言うきないね。てめえーは、私の獲物なんだからねえ！
！」

その瞬間、「ビュッ」という音とともに、真空刃が少女から放たれた。

青次は横に思いっきり転がろうと思ったが、もう遅かった。

「くっそお」

バキッ

すごい音が静かな街に響いた。

だが青次は無傷だった。

（なんだ。おれの能力でもいけるじゃん！）

青次の能力、ショックアブソーバー衝撃拡散。

受けた運動量を散らすことで衝撃を軽減する能力。

なので、真空刃の衝撃を拡散して対応したのだ。

だが少女はただニヤリと笑って言った。

「おおーっ！ やはりこの能力はいいねえ。超電磁砲との戦いに使えそうだねえ。」

よしっ。次を狙いにいこっかな。」

「おいっ！ どういうことだ！？ いきなり襲ってきて、いったいなんだったんだよ！！」

「おっと、ショックアブソーバー。もうお前には用はないの。じゃあね。」

そして、少女は何かを忘れていたような顔をしていった。

「そうだ、あんたには特別私の能力のことを教えてやる。」

私の能力は、誰かが能力を使っているのをみて、能力をまねするって感じ。

エンパスって言うらしんだけどねえ。

まあー、わかりやすくいえば、コピーねコピー。」

少女は青次に言うと、いきなり消えた。

テレポートでも使ったのだろう。

「コピーって・・・」

オレの能力もコピーされたってことか？？うそだろ・・・」

青次は、今までの出来事がほんとに現実なのかを疑った。

エンパス。(後書き)

次は未来！

現在はここでいったんストップです。

未来の学園都市。 (前書き)

こんばんは。 又は、こんにちは！

かみちゃん！です。

今回は未来の状況を書いてみました。

たぶん、設定は変わるかもしれないけどのせます。

未来の学園都市。

10年後の学園都市。

能力者が戦争に狩り出されていた。

戦争。戦争という単語だけで国と国の殺し合いってな感じにとらえる人は多いだろう。

だが、違うのだ。都市と都市の戦争なのだ！

御坂美琴をリーダーとするチーム「スパーク」。

一方通行をリーダーとするチーム「グループ」。

そして、今回はかみゃん！が登場します。（したらいいなあ・・・）

学園都市と第三都市が交差するとき、物語は始まる。

5年後

学園都市の能力開発の研究チームが孤立し、第三都市でひそかに研究を始めた。

彼らのチーム名^{スキル}。多重能力の研究に力を入れているチームである。

彼らの目的は、学園として戦争を仕掛け勝利し、窓のないビルを破壊。アレイスター・クローリーを殺害すること。

チーム（スキル）は注射器で、誰にでも簡単に力を与えることを目的に研究し、実現させた。

学園都市のスキルアウトは、第三都市に誘われ力を与えられる。

だが、スキルアウトの中には拒否したものもいる。

スキルアウトの中には、（自分になんかに能力が宿るはずがない）

と決め付けている者、能力とかいまさらなんだと思う者など。

そしてもしかしたら、学園都市が好きな者もいるかもしれない。

彼らスキルアウトは、これからどう動くのか。

そして、学園都市のために戦えるのか。

未来の学園都市。(後書き)

スキルアウトのことも書きたいんだよなあ

第三都市にきました

御坂美琴VSエンパス（前書き）

書きました。

皆さんお手柔らかに。

御坂美琴VSエンパス

10年後の学園都市。

ダンバン ダダダダッ

ドン スダダダダッ！

現在の学園都市とは違い、銃声や爆撃音などのイレギュラーな音が学園都市の第7学区で響いている。

いやそれだけではない。学園都市全体でだ。

戦争。

その単語だけで、国と国の殺し合いというスケールのでかさが表される。

戦争という単語はそれだけの意味を持っている。

そして学園都市。

今の学園都市を見ると、誰もがこう思うだろう。

「戦争だ。」と。

学園都市は30年も科学が進歩している。

外とは比べ物にならないくらいの破壊力を持つ兵器や、時速7000キロオーバーの

速度を武器にする超音速戦闘機など。

とにかく普通じゃない。

だが。

そんな学園都市と互角に戦っている敵がいる。

都市。

そう。国と国の戦争ではない。

都市と都市の戦争だ！

「残酷な戦いの中で。」

学園都市は戦争をしている。

第7学区では、戦闘用のパワードスーツが戦闘を繰り広げている。

パワードスーツ以外に生身の人間（超能力者）も戦っている。

いくら能力者でも、兵器と戦うのは不利だろうと誰もが思うだろう。

だが、彼らは苦戦している様子はなかった。

多分、レベル3・4ぐらいの能力者だろう。

学園都市は戦っている。

自分の大切なものを守るために。

あるものは、能力を使って敵をズタズタに引き裂く。

あるものは、学園都市製のライフルを連射し、敵を蜂の巣にした。

あるものは、足を銃で撃たれたのか、地面に倒れたまま動けない。

そんな状況の中で誰もが思っただろう。

（残酷だ……。戦争は残酷すぎる）と。

この殺し合いに、何の意味があるのか。

誰もわからない。

そんな残酷な戦いの中で

複数の、能力者達が集まっていた。

「みんな！もう少ししたらあいつがくると思うから、準備して。」

そんな事を言っているのは、学園都市レベル5の第3位、御坂美琴。

彼女はレベル5なので、戦争に参加は強制だ。

「お姉さま。本当にこんな作戦がうまくいくんですの?」

彼女はレベル4の空間移動。テレポート 風紀委員に所属している。ジャッジメント

「うまくいくわよ。アイツは絶対倒れる。いや、倒す」

そういった後、美琴は一人の少年に向かって言った。

「あんたは過去に行つて、このばかげた戦争を、この残酷な戦争をとめてちょうだい」

少年は、高校生くらいだろう。

どこの学校のかは分からないが、制服を着ていた。

少年は、分かりましたと言って、その場から姿を消した。

少年の能力は、時空間制御。

時空を操り、空間転移、時間転移、時間停止ができる。

レベルは測定不能らしく、不明である。

少年が場を去つた後に、

美琴が叫んだ!

「きたッ!

エンパス・・・」

その時、ドゴン!という音とともにいきなり強烈な光線が、美琴達

のいたところに直撃した。

美琴達は即座にあらゆる方向に飛び込んで、その攻撃を回避した。

その光線の名前、レールガン超電磁砲。

美琴が使う大技。

メダルコインなどを、音速の3倍の速さで打ち出す技だ。

その時向こうから声がした。

「久しぶりい、レールガン超電磁砲。いやあ〜ほんとに久しぶり。美琴ちゃん」

その声の主は、今の美琴と同じぐらいの年（22〜23歳ぐらい）で、服はすべて白で統一されていた。

は、砂鉄で剣を作った。

エンパスは、炎剣を作り上げた。

「勝負よ！エンパスのクソガキが！！」

ガギイイイ！！

美琴の剣と炎剣が交差した。

「エンパス・・・いや違う、秋野 みさき！」

御坂美琴VSエンパス（後書き）

次は過去に行った少年の物語です。

がんばって書きます。

村谷変時（前書き）

こんにちは。

かみちゃん！です。

未来の話が中途半端で区切ってしまいましたが、すみません。

ちゃんと書きますので。

そして、今回は未来から過去に行った少年のお話。

村谷変時

現在の学園都市。

第7学区に上条当麻の学生寮がある。

当麻の学生寮の隣の部屋に、新しい新入りがやってきた。

「ふう。何とかこれましたね。やっぱり平和なんだなあ。このときは新入りの名前は、村谷変時。」

彼の能力は、時空間制御。レベルは不明である。

彼は引越してきたとか、そういう普通の理由でここの学生寮にきたのではない。

そう。彼は10年後の未来からやってきた。

理由は、美琴（未来の）に戦争につながりそうな存在はつぶせと命令されたから。

簡単に言えば、10年後に都市同士の戦争がおきる。

学園都市と第三都市の戦争を。

それをとめる。それが彼の仕事なんだが・・・

「うーん。ただどなあ、どうやって戦争をとめるんだろう・・・」。

いつどこで誰が第三都市に脱走するのかも分からないしなあ。
もしかしたら、今もう動き出してるんじゃない？」

変時は、美琴に10年前に行って戦争をとめると命令されたのだが、細かいことは知らされていない。

変時は深くため息をついて、震えながら言った。

「それよりさぶっ」

今は11月ごろで、冷たい空気が変時に襲ってきたのだ。

とにかく自分の寮の部屋に行くことにした。

エレベーターを使い、自分の部屋の前に着いた。

変時はなんとなく、自分の部屋のお隣さんの名前を調べようと

お隣さんの部屋の入り口に来たのだが・・・

そこには、変時の知っていたような名前があった。

『上条 当麻』

「ん？ンンンッ！？かみじょうとうま・・・？」

変時はよほど気になったのか、寒さを忘れてその場で30分も悩み続けた。

「上条・・・美琴さん・・・能力を無効にする右手・・・」

さらに5分後、変時はやっと思い出した。

「うーん。ン？あああつ！美琴さん言ってたうわさのアイツだッ！」

変時は超難題の計算式を、1時間かけてようやく解いた！

って感じの達成感があったのだろうか、めっちゃくちゃ大きな声を出してしまった。

そのときいきなりお隣さんの所のドアが開いた。

ガチャ

「あなたは、誰？」

でてきたのは、白い修道服を着たシスターだった。

（こっつ、この人が・・・上条さん・・・？）

変時はそう思ったらしいが、明らかに間違っている。

白い修道服を着たシスターの名前はインデックス。

10万3000冊の魔道書を完全記憶している。

「いやっ、あの、なんでもありませんー!!」

変時はそういって、自分の部屋に走りこもつとしたときに他の誰かに話しかけられた。

「おい。ちょっと待てよ！お前もしかして新入りか？」

シスターの次は、ツンツン頭の少年が出てきた。

村谷変時（後書き）

はい、とうとうかみやんが出てきました。

あれ？今思ったけど、当麻の学校って・・・

なんて名前？？

幻想殺し（前書き）

こんにちは！今回は幻想殺しの説明をするために作った？的な物語です。

自分とはある魔術の禁書目録を知らない人でも、楽しく読めるような物語を目指しています！

アドバイスをよろしくお願いします。

幻想殺し

変時は今上条当麻の部屋にいる。

部屋にはこたつが置かれていた。

変時はさっきまでずっと外にいたからだろうか、自分の体が冷えていることにきずき

当麻にこたつに入っていいかを聞いた。

「かつ、上条さん。こつ、こお、こたつに入ってもいいですか!」

変時はなぜか緊張していた。

そんな変時に、当麻は普通にかえした。

「そんなこといちいち言わなくてもいいけど。あと、普通に当麻って呼んでいいぞ?」

俺達同じ年だろ?」

(そうかぁ。ここは過去。上条さんと俺は同じ年なんだっ)

「あぁっはい。そ、そうだなッ。よ、よろしく当麻!」

変時はこたつに入った。

あったかかった。当たり前なのだが、寒い中ずっと外にいた変時にとっては2倍も3倍も暖かかった。

変時は、なんとなく思いつきり足をこたつの中でのばした。

だがそのときだった。

変時の足に、おもいつきり何かが当たった。

変時はなんだろう？と思って、こたつの中をなぞこうとした瞬間、いきなり変時の顔面に三毛猫がとびかかって来た。

「うわっ」

と変時が声を出した瞬間、変時以外の世界の時間が止まった。

そう。変時の能力は、時空間制御。

時空を操り、空間転移、時間転移、時間停止ができる。

変時は、急にとびかかって来た三毛猫に驚き、反射的に能力を使ってしまった。

「はぁ・・・びっくりした。まさか猫がいたとはほんと・・・」

そこで変時の言葉は途切れた。

「何がびっくりしたんだ？つてか、なんだなんだ？インデックスが空中に浮いてるんですが！！」

という、当麻の声がキッチンらへんからしたからだ。

インデックスは多分、当麻にお決まりの噛み付きをしようとしてびかかっていたところで、

時間がとまった。当麻が言う空中に浮かんでる（空中で静止している）となる。

だが、そんなことはどうでもいい。

なぜ当麻が、変時が掌握した空間内で動いているかということだ。

理由は簡単で、当麻の右手に宿っている力幻想殺し（イメージブレイカー）の効果で

当麻自身は動けるのだろう。

だが、変時には理解できなかった。彼は、上条当麻がどんな能力を持っているかなど知らないからだ。

変時が当麻に尋ねる

「な、なんで、当麻は動けるんですか？」

「おっ、お前がやったのか？時間を止めたっていうのか？」

「は、はい。自分の能力でして……。それよりなぜ動けるのですか……？」

「多分、オレの右手が影響しているんだと思う。」

当麻はその後、イメージブレイカーのことを変時に説明して言った

「あと、多分だけど、俺がお前に右手で触れたらこの幻想はぶち壊れると思うぞ」

「え？ほんとうですか？？ちょっとやってみてください！」

変時は興味があるのかそんな事をいった。

当麻は「いいけど」と言い、変時の肩の上に右手をおいた。

その瞬間、変な音と共に、全世界の時間が正常に動き出した。

そして、当麻の部屋では

バタツゴト　といやあくな音がした。

それは、インデックスが床に落ちた音だった。

標的（当麻）が移動したまま時間停止が解かれたから、インデックスは床にダイブしたのである。

「とおおおまああああッ！！！！」

獣のようなインデックスの声を合図に、

ガブッ！

っと、当麻の頭がい骨にひびが入った。

変時は驚いて、当麻の部屋から「すみませんでしたー！！！！！」

と叫びながら出ていった。

幻想殺し（後書き）

次はどういうふうにか書こうかなあ〜

なんか最近まとまってる感じが・・・

誰か文才能力くれ〜

最後の言葉・・・（前書き）

こんばんわ。

なんか、自分で読み返して見たんですが・・・

まとまってなぞぎ・・・

がんばって取り戻します！

最後の言葉・・・

朝、変時は学校の準備をし、当麻を誘って学校に行こうということ
で、

当麻を誘っていた。

「おはよー当麻！」

「おーは・・・」

当麻も言い返そうと思ったが、言葉がとまった。

当麻は変時の名前を聞いていなかったからだ。

「えーと、今頃なんだけど名前教えてくれないか？」

「あつ、ごめんごめん教えてなかったね。僕の名前は村谷変時。よろしく当麻！」

「うーん。よし、呼ぶときはふつうに変時でいいか？」

「うん。未来・・・前にもそう呼ばれてたしッ！」

「やばっ。当麻には言ってもいいと思うが、いきなりはまずいッ！」

変時は、今は多分言ってはだめだろう秘密のワードを口に出してしまっただが、

不幸中の幸いにも、当麻はきずいていなかった。

「じゃあ、変時で決定だ！改めてよろしくな変時！」

変時は「ああっ、よろしく」と言っ、当麻と一緒に学校に向かった。

普通の学校生活たがひんが終わって、変時達は下校していた。

「なあ当麻。ほんとにあのピンクの髪で小さい人は、先生なの？」

「んあ？小萌先生のことか？それなら一応先生だけど」

「そっ、そうなんだ・・・」

変時にとっては、小萌先生はとても印象的だったのだろう。

いや、たぶん誰でも初めて小萌先生を見たら驚くだろうし、印象も強いだろう。

変時は当麻に未来のことを話そうか悩んでいた。

（どうしよう。頼っていいって美琴さん（未来の）が言ってたし・・・よし！もっいっっちゃおう！）

変時は当麻に未来のことを話すことに決めた。

ほんとはもう少し様子を見て言おうとしていたのだが、早めに伝え

ておいた方がいいと
変時は思ったのだ)

「なあ、当麻。これから時間空いてる？少し・・・いや、たくさん話したいことがあるんだけど」

「ああ、時間ならあいてるけど。」

「ありがとう、当麻！」

「おおっ！じゃあ、またあとで！」

二人はそういって自分の部屋へと入った。

1時間後。

変時の携帯がなった。

変時が画面に目をやると、そこには「リーダー」とあった。

変時は未来から？どうやって！と思ったが、とにかく電話にでた。

「リーダー！どうしたんですか！？」

『変時・・・ハア、ちよつと最後に伝えたいことがッ、ハア、あつて・・・』

戦闘中なのか、未来の美琴は息を切らしていた。

だが、『最後に』という言葉に、変時はいやな予感がした。

変時はとにかく冷静に「はい」と答えて美琴の話を聞いた。

『言う、わよ。上条当麻と、ハア、過去のわたしを、まもっでッ！』

と、美琴が言った瞬間、通話が切れた。

もっと正確に言えば、美琴が言い終わった瞬間に、聞き覚えのある声が聞こえた。

『さよならあー。みことちゃん』と。

変時は「くそおおおッ！」と叫んだ。

変時の目から、涙がたくさんでた。当たり前だ。知り合い……いや、そんなんじゃない。

大切な大切な仲間が……。

変事は今こそ思った。戦争を必ず止めると。

大切な、大切なものを奪った戦争をッ！

その時、玄関から声が聞こえた。

「おい、変時。どうしたんだ？」と。

変時はこう答えた。

「何も無いよ、当麻。それよりさっき言った話をしよう」
と。

最後の言葉・・・（後書き）

未来の美琴・・・

死んだかも・・・

訂正しました

書き方が・・・ね

やるべきこと(前書き)

ちょっと、予定していたストーリーからそれてる気がしますww

がんばって軌道修正しますね〜

やるべきこと

当麻と変時は、変時の部屋で話していた。

「僕は、未来からやってきました。自分の能力をつかってですけど」

「未来から・・・やってきただけ？冗談はやめよ・・・」

当麻が途中で口を止めたのは、変時が「冗談ではありません」といったからだ。

変時は、当麻に言わせないようにするかのように口を動かした。

「本当に冗談ではないんです。あなたは僕の能力を見ただけでしょう？僕の能力は時空間制御。レベル6ぐらいのレベルであれば、タイムトラベルもできるんです。」

「お前が未来から来たとかはどうでもいい。ただそれが本当なら、お前は何をしにきたんだ？」

それに、レベル6ってどういうことだ？学園都市ではレベル5が最大だろ？お前はレベル6なのか？」

変時は少し黙ってから言った。

「未来にスキルチャージャーっていう能力を持つてる仲間がいて、一時的に自分の能力を

レベル6ぐらいまであげてもらったんです。

そしてここ（過去）にきた理由は・・・未来でおこる都市戦争を止めるためです。」

当麻は首をかしげて「都市戦争・・・だって？」とつぶやいた。

はい、と変時は言い、話を続けた。

「未来では、学園都市と第三都市の戦争が起こってるんです。」

「第三都市だと？そんな都市はきいたことないんだけど」

「いつかは分からないんですが、大阪の方で能力開発都市『第三都市』ができるんですよ。」

学園都市からある能力開発チーム『スキル』が脱走し、新能力開発都市製作プロジェクトとともに、

脳への負担が大きすぎるため実現不可能とされている能力『多重能力』を作り出すプロジェクト
を実行し、成功させているんです。」

「第三都市か・・・。まだ今第三都市は存在してねーって言うなら話は簡単だ。」

第三都市ができる前に計画をつぶせばいい。」

変時は少し考えて何か思いついたような顔をして、当麻に言った。

「まだ第三都市が存在しないってことは、まだ能力開発チーム『スキル』は学園都市内にいるはず！」

そこを抑えましょう！」

変時の意見に当麻は「それがいい」といい賛成した。

当麻と変時のやるべきことは決まった。

やるべきこと（後書き）

なんか難しいです。

スキルチャージャーという能力を入れてみました。

いや、必要でしたw w

他の能力者の能力を、倍増する能力です。

正直自分はほしくありませんねw

午後4時ジャスト（前書き）

こんにちは

今日は<スキル>について書きます。

字間違えとかありましたら、教えてくれたらうれしいです。

午後4時ジャスト

学園都市 第10学区 とある能力研究施設

「よし。準備は整ったな。外の護衛部隊には伝えたか？」

40歳ぐらいの男の声が施設内で響いた。

「いえまだ伝えておりません。普通に連絡をとれば、アンチスキルに感知される恐れがあります。」

今、例の無線機を準備してますのでおまちください。」

言葉を返してきたのは、20歳ぐらいの男だろう。

それから40歳ぐらいの男は、武装した集団に向かっていった。

「お前ら『サイレント・キル』部隊『御坂美琴・上条当麻』を抹殺しろ。」

奴らは面倒だからな。それに統括理事長のお気に入りだからな。」

『サイレント・キル』部隊は「了解。」と言い武器の整備などを始めた。

部隊の人数はざっと20人。全員、過去に殺人などの犯罪を犯したような悪党だ。

彼らの任務は、おとりと言ったらいいのだろうか。

チーム『スキル』が学園都市から脱走するときに、『サイレント・キル』が学園都市で価値がある人物

『上条当麻・御坂美琴』を狙い抹殺することで、学園都市がそちらに気をとられるだろう。

その間に『スキル』が脱走するのだ。

その時、20歳くらいの男が言った。

「つながりました木原さん。変わります」

20歳くらいの男は、40歳くらいの男。そう木原多才に無線を渡した。

「これから外へ（学園都市の）出る。マリ、お前達は外のゲートで待機しとけ。

そして、奴ら（科学結社）にもこのことを伝える。」

無線の相手は「了解」と言っただけで無線をきった。

「車を出せ。そしてアレイスター。これからは、我々の第三都市の時代だ。」

11月25日 午後4時ジャストに、チーム<スキル>は動き出した。

午後4時ジャスト(後書き)

はあ。疲れましたw w

なんか話がちやごちやにw w

次はどうしようかなあゝ

事の始まり（前書き）

書きました。

はあ・・・

なんか、最近頭にくることばっかあるんですね・・・

事の始まり

11月25日 午後5時30分 第7学区 中央通り『コンビニ
AWSON』

変時は学校の帰りに、あつたかい飲み物を買うためにコンビニによつていた。

「なにのもうかなあ。あつたかいのあつたかいの」

変時は獲物を決めたのだろう、いちごおでんっていうジュース？をつかんで、

レジに持っていった。

実はいうと変時は、いちごおでんが大好きなのだ。

いちごおでんは、ホットで売られている。夏でも。

変時は、夏でも「いちごおでん」を買って冷蔵庫で冷やしてまでして飲む。

学園都市で、「いちごおでん」がそこまで好きならつは変時しかないだろう。

自分は飲みたくないね。絶対にww。

おっと失礼。話に戻ろう。

変時はレジをすませ、笑顔でコンビニを出ようとした時、誰かに声をかけられた。

「ねえ、ちつとそこのアンタ！待ちなさい！」

変時は『なんだ？』と思って後ろを振り返るとそこには・・・御坂リーダー！？

変時はびっくりしすぎて心臓が止まるかと思った。

（なぜこのタイミングで御坂さんに・・・）

「それでリー・・・御坂さんなんですか？」

「ちょっと、何で私の名前知ってるわけ？もしかしてストーカー？」
御坂が言ったことに変時少し頭にきたのだろう。いろいろと調べてやろうと思ったが、

我慢した。

「それで、・・・なんのようなんです？」

変時はもう一回聞いてみた。

美琴はなぜか顔を真っ赤にして言った。

「アンタ、あのバカと最近一緒にいるでしょ？」

「あのバカ？誰のことですか？」

「だからツンツン頭のバカよッ！いい加減分かれええッ！」

美琴からバツチンバツチン青白い電気が発している。

店員さんが怖い目でにらんでいることに変時はきずき、

「うわっ、ここコンビニだよコンビニッ！」

と変時が美琴に言ったが、美琴は無視していつてきた。

「あんたは、あのバカとどっという関係なわけ？」

なんか予想外なことを言ってきた美琴に、どうかえせばいいか分からなかった。

「ええっと・・・関係ってどっという関係？」

「だから・・・その・・・とにかくアンタはあのバカが好きなのかッ！」

青白い電撃がビリビリと・・・

そして変時は普通に返した。

「好きだよ。それがどうした？」

美琴はものすごく顔を赤くして何かを言おうとしているが、言葉になっていない。

何かを言おうとしている美琴にきずかず変時はさらに言う。

「当麻はいいやつだし、たいていのヤツは好きだと思っぞ。困っている人に声をかけてたり、

自分の不幸を人に押し付けたりしない。だから、友達として当麻は大好きだよ。」

美琴は受験に受かって安心したときのように息を吐いて深呼吸していた。

美琴は「ならいいのよ」と変時に言って、コンビニを出て行った。

変時は「自分はいい事を言ったッ!」とか勝手に思いながらコンビニをスキップで出ようとしたら

「ドッッ」

鈍い音がコンビニに響いた。

変時誰かがぶつかった音だった。ぶつかった相手は……

特徴を言おう。髪の毛は白で瞳は赤。黒と白の模様が入ったTシャツに現代的な杖をついた少年だった。

変時は知っている。

(一方通行『アクセラレータ』……)

そう。学園都市の超能力者の第1位。

「すつ、すみません!!」

変時は終わった・・・と思っただが、

「チツ。ちゃんとまえ向いてあるけエ、くそがきがア」

とアクセラレータは言ってコンビニに入ってしまった。

変時はさっき買った『いちごおでん』をあけて飲み、一言つぶやいた。

「今日はいろいろあったなあ。」

変時がつぶやいた直後、銃声があった。

バンバン

それと同時に

ゴガッ!

と、何か雷的なものが落ちた音がした。

変時は走る。

音のしたほうへ。

事の始まり（後書き）

読んでくれた人

ありがとうございます。

次回もがんばって書きます。

11月25日? (前書き)

こんにちは。かみちゃん!です。

なんかストーリー変になってるようなきが・・・

続きを書くのがだんだん難しくなってきた感じです。

なんか文章変ですねw

とりあえず書きましたので、見ていただければうれしいです。

11月25日？

1、

11月25日 午後4時5分。

「おい。そろそろ時間だぞ。車に乗り込め」

第1学区のとある研究施設前では、黒いワンボックスカーが5台止めてあった。

黒のワンボックスカーに、20人くらいの黒ずくめの男達が入り込んでいた。

彼らは『サイレント・キル』という部隊で、『スキル』というチームから任務が出されていた。

その内容は、標的『御坂美琴・上条当麻』を完全に殺すというシンブルなものであった。

だが、御坂美琴が敵となるとそうは簡単にはいかないだろう。

御坂美琴は、学園都市の超能力者（レベル5）で第3位だ。

ふつうに戦っても普通に負ける。そんな敵だ。

だが、サイレント・キルのメンバーの顔には不安の表情はなかった。

「俺たちには一様これがある。だが、気お抜かないようにするんだ。

いくらこれを持っていたとしても、相手は超能力者でレベル5だからな」

黒ずくめの中の一人がそんなことを言ったとき、車が走り出した。

彼らの任務の始まりだ。

2、

上条当麻はインデックスをおいて、一人で第7学区にあるスーパーにきていた。

今日は、スーパーでキャベツやトマトなどの野菜がお買い得セール。

当麻はこれ目当てでスーパーに来ていた。

「たすかった……。これで12月までは生きていける！」

当麻は、今日お得に手に入れた野菜どもで、12月まで生きていくと心に誓った。

「早く帰って、上条さん特性の野菜炒めモドキを、腹ペコモンスター・インデックスさんに食わせてやりますか！」

そついい当麻がスーパーから出たとき、変時が当麻よりも1個向こうの通りをはしっていった。

当麻は大声で変時に向かって叫んだ。

「おい変時。どこに向かってんだあー？」

当麻の声が聞こえたのか、変時は当麻の方を向き叫んだ。

「なんかいやな予感がするんです！銃声と破壊音が聞こえたら
んですよー！」

当麻はすぐに返してきた。

「変時。今からそっちに行く！」

3、

『サイレント・キル』の黒いワンボックスカーは、第7学区の小さな公園の近くに止められていた。

すでに、15人ぐらいは標的を探しに行ったのだろうか、3台のワンボックスカーの中は空っぽだった。

「おい、標的は見つかったか？応答しろ」

1台目のワンボックスカーの中では、サイレント・キルのリーダーなのだろう。

無線でやり取りをしていた。

『こちらチーム4。まだ見つかっておりません。』

『こちらチーム3。今のところ確認していません』

リーダーは、こめかみにしわを寄せていた。

「んん？チーム5が応答してこないんだが・・・チーム5。今の現状はどうなっている。応答してくれ！」

だが、チーム5から応答は帰ってこない。

（まさか・・・やられたのか？ くそおツ！）

リーダーは、おもいつきり車の窓ガラスを殴りつけた。

その時、無線が入ってきた。

『じゃまねえ、ほんとにじゃまね。私の獲物を狙うやつはねえ』

チーム5からの無線だったのだが、聞いたことのない声が返ってきた。

声を聞いてみるに少女の声だった。

「お前は・・・御坂美琴だな？ まだ、おれた・・・」

リーダーの音が突然途切れた。

少女が『今から殺してあげるなあ』といったのと、車の前に白で統一された服装の少女が立っていたからだ。

少女は、サイレント・キルが使っている無線を右手に持っていた。

リーダーは「チッ」と舌打ちをして言った。

「お前ら、目の前にいるヤツをあの世行きにするぞ！」

約10人の武装した黒ずくめの男達が、車から出てきた。

だが少女は余裕の笑みを放ち言った。

「ちょうどいいねえ。試したかった能力があるのよ」

そう。エンパスの少女だ。ある意味チート能力者。

エンパスの右手に「轟」とすさまじい音とともに炎剣が作られた。

サイレント・キルのメンバー達は銃の引き金を引いた。

「ピュッ」x約10

そんな音と同時に、青いレーザーが放たれた。

KSS-74E。彼らが使っている銃で、撃つと弾がでるとかそういうものではない。

撃つと青色のレーザー光線が放たれる。だが、それで相手を蜂の巣にできるのではなくて、頭を狙って撃つても

レーザーが頭を貫くこともない。

このレーザーは、能力者にしか通用しない武器だ。

レーザーを能力者に当てると、能力者は能力を一時的に失う。〈約30秒〉

そうならば相手ただの人間だ。

もちろんエンパスも能力者。あたったら、ただの少女になってしま
い勝ちめはない。

エンパスは炎剣を握ったまま動かなかった。

ふつうにもう逃げるには手遅れだった。

だが、レーザーは少女の頭に直撃ってことはなかった。

理由は簡単。少女にレーザー光線が当たる前に消えたのだ。

「相手は発火能力者じゃないのか？」

サイレント・キルの男達は、思わずそうつぶやいた。

男達はもう一度引き金をひこうとしたが、きずいたら少女はいな
かった。

男達が戸惑っているとき、いきなり銃声が鳴った。

「ダン、ダダン」

銃声とともに、二人の男が倒れた。

「なにっ、貴様裏切るきかッ！」

そうだったのはこの部隊のリーダーであり、撃ったのはメンバーの一人だった。

撃った男は震えながら言った

「おっ、俺じゃないんだ・・・ たった、たすけてくれえあああがッ」

男は頭を抑えながら地面に倒れこんだ。

そのあと、次々に男達が頭を抑えながら倒れていった。

公園前の道路には、黒づくめの男達が一人を除いて倒れていた。

そう。残ったのはこの部隊のリーダー。

リーダーは思った。

(勝てんねえ・・・なんだよあれ、ばっ、化け物め！
逃げる・・・逃げるしかねえ!!！)

リーダー核である男が車を見て走ろうとしたとき、

『ボウッ!』

急に車が炎上した。

そして、炎上した車のまえにいきなり少女が現れた。

「うつ、嘘だろ……。」

「逃がすわけえ、ないでしょ。おまえだけ生き残れるとも思ってるの？」

エンパスはそう言うと、地面を思いっきりけつて一瞬でリーダーの前まで移動した。

リーダーは何も考えなかった。

エンパスがしゃべってからわずか0.3秒。

エンパスが握っていた炎剣が、リーダーの心臓を焼き払った。

「あいてにならないねえ……。」

その後、エンパスに異変があった。

「頭痛……？能力を制御しきれないかもねえ。

このままじゃ、暴走したとき私は消えてなくなっちゃう。

もっと能力を試す必要があ、あるかもねえ……。」

エンパスはその場から消えた。

11月25日? (後書き)

どうでしたか?

エンパスは強すぎます。強すぎてもう勝てません。

でもそうだったら、この物語は成り立たないと思います。

なので、エンパスに少し弱点と言うか、まあそんなのをオンにしてみました。

次いつ投票するか分かりませんが、なるべく早く書き上げて投票します!

11月25日? (前書き)

かけました!

時間かかりました。

なんか最近書くのほんとに難しく感じるようになってきたんですよ。

この前の続きです。見てください。

11月25日？

11月25日 5時4分

当麻と変時は第7学区の裏通りにいた。

銃声を頼りに目的地に着いたのだろう。

そこには黒ずくめで軽装備をした人間が、ぼろ雑巾のようにスタズ
タにされていた。

当麻はこうというのが苦手なのだろうか、ちょっと離れたところで携
帯をいじっていた。

「この銃・・・KSS-74E。第三都市との戦闘に使われていた
あの武器の原型か・・・」

変時は、KSS-74Eという武器のことを知っていたのだろう。

変時はその銃を手に取り、自分のズボンのポケットにしまった。

（これから先に使えるだろう。一応持つておこう。もう過去にはい
けない・・・過去にいければ助かるんだけど）

変時は時空間を制御できる。

その能力を応用して、過去・未来にタイムトラベルできるのだが、
レベル6ぐらいの力が必要となる。

変時はレベル6ではないためタイムトラベルができないのだ。

変時は「よしっ」と言って当麻のほうを向いていった。

「当麻、もう用はすんだから寮に戻ろう」

「おおっ。で、変時くちよつと来てくれ！」

当麻が携帯を見ながらそういつてきたので、変時は走って当麻のところに行った。

「で、どうしたの？」

「ちよつとこれ見てくれ。」

当麻は携帯の画面を見せてきたので、変時は画面に目をやった。

内容はニュースだった。携帯のワンセグ機能でも使っているのだから。

ニュースではこんなことを言っていた。

『今日、第7学区の街はずれの公園まえで、組織と組織のぶつかり合いがありました。

被害を受けた人たちですが、過去に殺人事件などを起すなどした指名手配中の

人たちでした。彼らの所属していた組織についてアンチスキルが全力で取調べ中です。』

アナウンサーの人が次の記事に移ろうとしたときに、スタッフの人

だろう。

アナウンサーに何かを伝えた。

そして、アナウンサーが言った。

『えっ、今情報が来ました。つい先ほど、学園都市から超能力研究組織のあるチームが強引に学園都市から脱走したという報告を受けました』

「やられましたね」

変時が低い声でつぶやいた。

当麻が首をかしげながら変時に質問した。

「あるチームって・・・お前が言ってた『スキル』ってヤツらなのか？」

「ええ。多分そうだと思います。絶対とはやはりまだいえませんが、ほぼ確実にそうですね」

当麻は少し考えて、短く言った。

「で、これからどうするんだ？」

「第三都市は戦争をする前に、まずあなたをつぶしにきますね。その後に、レベル5などの

厄介な敵になりそうな人物を狙いにくるでしょう。」

変時は右手を力いっぱい握り締めて言った。

「やってやりましょう。俺たちで」

その時いきなり変時たちの後ろから声がした。

「ああつ。重要人物と出くわしてしまったねえ」

少女がいた。そう、エンパスの。

常盤台の学生寮。

御坂美琴はベットの上で寝転がっていた。

(ちょっと考えすぎたはね。それにしても、帰りに聞こえた銃声に破壊音・・・)

いったいなんだったのかしら)

美琴は今日のことについて考えていたら、後ろのほうでパソコンをあたっていている白井黒子が言った。

「組織と組織のぶつかり合い・・・ですって？超能力研究組織のあるチームが学園都市から

脱走・・・」

黒子がそんな事をつぶやいたのに、美琴が食いついた。

「組織と組織のぶつかり合い？ちょっと黒子。どういふことなの？」

「お姉さま、わたくしに聞かれても分かりませんの」

その時、黒子の携帯が鳴った。

白井は携帯の通話ボタンを押して電話に出た。

「なんですの？」

『アンチスキルとの緊急合同会議があるから急いできて』

通話相手はこのり先輩だった。

「すぐ行きますの」

白井は携帯をスカートのポケットにしまって言った。

「お姉さま。これからアンチスキルとの合同会議がありますの。おとなしくしていてくださいませ」

「何よその言い方っ！って黒子、無視するなああ！」

美琴は黒子に言い返したが、無視して部屋から出て行ってしまった。

「アンチスキルとの合同会議かぁ・・・またいやな予感がするわね」

第三都市 第1研究区 ビルの中

「木原さん。やはり、サイレント・キルは使えませんでしたね」

通信機をセットしていた男がそんなことをいった。

木原多才は笑いながら返した。

「ふっ、使い物には一応なったんだぞ？ごみ虫どもが騒ぎを起こしたからこそ我らがこうして

楽に脱走できたじゃないか。もうそんなことはどうでもいい。お前達は、例のものをそこら辺のバカども使って実験しろ。なるべく早く学園都市をつぶしたいからな。かみちゃん」

はい。了解しましたといって、男は部屋かみちゃんから出て行った。

木原はにやっと笑いつぶやいた。

「アレイスター、お前の計画をぶち壊してやるなあ。そして、マリ。お前には任務があるぞ？

まあ、お前達のことだ。ごみ虫なんかよりは遥かに期待できるからなあ」

マリと呼ばれた人物は缶コーヒーを飲みながら言った

「一方通行ですネ。任せてください」
アクセラレータ

マりは片手で、スチール缶を握りつぶしてゴミ箱に投げ入れた。

11月25日? (後書き)

何とかかけましたw

次かけるといいなあ〜

評価・感想などもできればお願いします。

励みになるので。

あと、アドバイスもばんばんくねるとうれしいです。

あと、マリはいつたい何物なんだ!?!w

s u k i r u a u t o 〱 希望の裏の罟 (前書き)

やっとかけました！

今回は「スキルアウト」のお話です。

楽しんで読んでいただければ幸いです。

s u k i r u a u t o 希望の裏の罠

第十学区 「ストレンジ」

ここはスキルアウトの街と言っていていいだろう。

ストレンジは、統制された学園都市にあるとは思えないほどの荒れ果てたスラムで街はすさまじっていた。

スキルアウトとは、学園都市の無能力者の武装無能力集団で、銃などの武器を普通に持っている。

ストレンジはそんなスキルアウトのい居場所である。

そんなストレンジで、とあるスキルアウト達が集まって話していた。

「おい、きいたか？第三都市ってあるだっろ？そこに行けば誰でも注射器一本で能力が手に入るんだとよ。

俺たちでもだぞ？」

第三都市。

大阪府・奈良県・和歌山県に跨る円形の都市。学園都市をモデルにした都市で、面積は学園都市の2分の1、人口は110万人で、

学園都市みたいに学生が人口の8割を占めているとかはない。

科学の差は、学園都市とあまり変わらない。

第三都市は、注射器で能力を与える。らしい。

「で、俺は第三都市に誘われたんだ。俺は行ってみようと思うんだが、どうだ？お前も一緒にいかねーか？

別に無理はいわねーけど。くるんなら、ストレンジ大通りに8時までここいつてことだから」

それに対していろんな答えが返ってくる。

「俺もいくぞ！もし、能力手に入らなかつたらぶつ殺すまでだけだな」と言う者。

「ああっ？俺は誰も信じねーんだよ」と言う者。

「俺はこのままでいいんだ。ここが俺の居場所なんだよ」と笑いなから言うもの。

結果、集まったのは100人くらいだった。

大通りには、黒いワンボックスカーが50台くらい止められていた。

先頭のワンボックスカー寄りかかっている30代半ばぐらいの男がいた。

名前は、坂田秀雄^{さかたひでお}。

特徴は、髪の毛は黒でオールバック、黒いサングラス、茶色のロングコート、普通のジーンズ。

なんか、間違った探偵さんってイメージが強かった。

そんな坂田は、携帯電話で誰かと話していた。

「木原さん。だいたい100人程度は集まっていますよ。事は順調に進んでるんじゃないですかねえ。」

あと、こんなガキドモがそんなに貴重なそんざいなんですか？まあ、いいんですけどね・・・」

『知りたいか坂田君？学園都市の無能力者だからなのだよ。実にシンプルだろ？』

ものすごい分かりやすそうで説明不足な答えが返ってきた。

「あはははははは。分かりやす過ぎますね。じゃあ、この貴重なガキドモを、大切にそちらへ連れて行きますね」

坂田は通話を切った。

彼はスキルアウトの集団に向かっていった。

「今から学園都市をでる。途中、アンチスキルとの交戦状態になるかもしれないが・・・大丈夫だ。」

俺の任務はお前達を無事連れ出すこと。そして、俺は任務を絶対に成功させる男だからな」

スキルアウト達は「分かりました」と言って、ワンボックスカーに乗り出した。

11月26日。

スキルアウトに乗せた車は走り出した。

木原

「スキルアウトどもにあれを使用しろ。面白い反応がでるぞ？頼むぞ」

s u k i r u a u t o 〱 希望の裏の罟 (後書き)

次はなにかこっかなあ・・・

ゆっくり考えます！w w

では

筋肉痛・・・やばいw w w w

追跡（前書き）

こんばんは。

久しぶりです。

オリスト最近詰まるんですが・・・

今回は、自力で書いたんで少し変になってるかも。

まあ、楽しんでくれれば幸いです。

追跡

第7学区の街中をアクセラレータは歩いていた。

コンビニで買ったのだろう、5本ぐらいの缶コーヒーが入った袋を右手にぶら下げていた。

左手には現代的な杖を待っている。

そんなアクセラレータは眉をゆがめて、缶コーヒーの入った袋を地面に置き携帯を取り出した。

アクセラレータの携帯がなったからだ。

アクセラレータは舌打ちをして携帯の通話に応じた。

「なんのよオだ、くそサングラスが」

『わかるだろ？言わなくてもわかるよな？』

通話相手は土御門だった。

アクセラレータは舌打ちをして言った。

「で、どオーいうヤツを上のヤツらは消したいンだあ？」

土御門は軽い調子で言った。

『スキルアウトだ。』

「スキルアウトだと？なんであんな三下どもを除去しなけりゃならねえんだ」

『スキルアウトの一部が学園都市からの脱走をはかるうとしている。そいつらがターゲットだ。』

あと、今そつちにキャンピングカーがお前を迎えにいつてるはずだ。それで向かってくれ。』

その時、アクセラレータの隣にキャンピングカーがゆっくりと停車した。

「ちっ、オレに拒否権はなしか。おもしれエ・・・」

アクセラレータは携帯をしまい、コーヒーの入った袋を持ってキャンピングカーに乗った。

中にはいつものグループのメンバーはいなかった。

アクセラレータはソファアに飛び乗ってつぶやいた。

「今度は何をたくらんだア・・・」

その後、運転手の男の「出るぞ」という声と同時に、

アクセラレータを乗せたキャンピングカーは地獄のそこへと進みだした。

変時はエンパスの少女を見た瞬間、背筋が凍りついたような感じがした。

(こいつは・・・なぜこのタイミングでこいつにッ！)

エンパスは変時の方を見て少し考えてから言った。

「私のこと知ってるの？まあ、どうでもいいけど。それよりそこ」

エンパスは当麻に指をさして言った。

「アンタは幻想殺し（イマジンプレイカー）でしょ？私はアンタの能力は理解できなから興味はないけど。」

エンパスは「あと」と続けて言った。

「私はアンタ達の敵じゃない。じゃまするんなら私の敵確定だからねえ」

そういつてエンパスはテレポートを使ってどっかに行った。

当麻は変時に話しかけた。

「あいつは誰なんだ？オレのこと知ってたっばいけど」

「あいつはエンパスだ！やばい・・・追うぞ当麻！！」

そういうと、変時は表通りの方へ走り出した。

当麻もとにかく追うことにした。

だが、当麻は少し気になることがあった。

（変時の能力は確か時空間制御だよな……。ならなんで能力を使わないんだ？あいつは世界中の空間を一時的に止めることができるはずなのに。きずいていないわけじゃなさそうだけど……）

そう思いながらも当麻は変時にそのことは言わなかった。

「それより」と当麻は変時に話しかけた。

「お前、あいつがどこに行ったのか分かるのか？」

「わからない。でも、動かなきゃ！」

当麻と変時は夜の街を走る。

追跡（後書き）

また、いつ投票できるのか分かりません。

一応、今はテスト期間ですし。

いろいろと忙しいので、落ち着いたらまた投票しますね。

ではまた！

しゃねこうへ〜

とある戦闘（前書き）

こんにちは。

戦闘シーンってなんでこんなに書くの難しいんだろ。

とりあえず、一方さんの戦闘のはじまりです。

一方さんも強いけど、坂田は強すぎ！？

とある戦闘

スキルアウト約100人を乗せたワンボックスカー（50台）は、第23学区に向かっていた。

アンチスキルなどの妨害は今のところなくスムーズに計画は進んでいた。

第23学区は、一学区を丸ごと航空・宇宙開発分野のために占有させている、一般学生立入禁止の特殊な学区である。

それで、なぜ第23学区に向かっているのかというと、第23学区に第3都市行きの超音速の飛行機を

待たせてあるからだ。

その超音速の飛行機は、表向きは学芸都市行きなのだが、パイロットからその関係者まで第三都市のスパイである。

そのスパイは第23学区で働いているものたちなので、疑われることはまずないだろう。

一番先頭のワンボックスカーの助手席に、サングラスをかけたオールバックの坂田が乗っていた。

坂田は学園都市の飲み物だろう、黒豆サイダーという黒豆の味がする？サイダー？を飲んでいた。

「うえっ、何だあこの味は。思いつきり黒豆の味じゃなか。はあ・・

・、あつ?」

キイイイイッ!

その時車がいきなり急ブレーキをかけた。

理由は、いきなり横からキャンピングカーが飛び出してきたのと同じ時に、白い髪をした少年がドアから転がり出てきたからだ。

「なんだアイツは。アンチスキルじゃあ・・・ないよな。じゃあなんなんだ?」

少年は坂田の方を見て、にやっとしながらつぶやいた。

「こっから先は一方通行だ。進入禁止つてなア!」

そう。少年は学園都市の最強のレベル5 アクセラレータ 一方通行だ。

アクセラレータは、首の後ろにあるチャージャーに右手を伸ばした。チャージャーにはスイッチが2つあって、ひとつ目のスイッチ

は脳が半分しかないアクセラレータの日常を可能とするもので、二つ目のスイッチは能力「ベクトル操作」を使用可能にする。

アクセラレータは2つ目のスイッチをオンにした。

これで、学園都市最強のレベル5の降臨だ。

坂田の隣の席に座っている運転手が口を震わせながら坂田に言った。

「あつ、あいつは、アクセラレータだ！この学園都市最強の腐った化け物だあッ！」

坂田は何か思い出したかのような顔をして車の外にでた。

「んで、俺たちに何のようなんだ？じゃまするんなら容赦せんぞ」

アクセラレータは、左手に持っていた杖を後ろへ投げ捨て返答した。

「あん？ならオマエたちは何してんだ？スキルアウトなんか学園都市から連れ出してとしてどオーするんだ」

「簡単だよ。仕事だ。木原さんに頼まれたからだよ」

アクセラレータは眉をひそめ、「木原・・・だと」とつぶやいてそのまま続けた。

「とにかくぶっ潰してからカンがえるか」

そう言った瞬間、アクセラレータはものすごい勢いで、坂田の方に走り出した。

そして、少し触れただけで何もかも粉碎するあの両手を突き出した。音もなくアクセラレータの両手は、坂田の腹の辺りにめり込んでいた。

手首の所までめり込んでいるのだが・・・

「ん？どうしたんだ、ぜんぜん痛くもなんともないぞ？」

「はあ？」

アクセラレータは眉をひそめて両手を引き抜いた。いや、違う。

そもそも物体にめり込んではいなかった。

(チツ、こいつ)

アクセラレータは後ろに10メートルほどジャンプして、コンクリートに右足を思いつきり振り落とした。

ドゴン！

ものすごい破壊音と共に、コンクリートの破片がいくつか宙に舞った。

「これはどオーだ！」

そういいながらアクセラレータは、宙に舞った破片のうち一番大きな破片を、坂田に向かって思いつきり蹴り飛ばした。

音速の速さでその破片は坂田に襲い掛かった。

だが、

ズドーン！

ワンボックスカーが爆発する音だった。正確に言えば、坂田の真後ろに止まっていたワンボックスカーが、だ。

坂田は、仕事に失敗した時のような顔をしながらアクセラレータに言った。

「おい、ちょっと待て！大事な品物を傷つけるような攻撃はやめろ」

「じゃあ止めてみるよオ。自分の身を犠牲にして、おにもつを守ってみるオ三下がッ！」

アクセラレータはそういうと、近くにあったゴミ箱を右手でつかみ坂田に投げ飛ばした。もちろん音速の速さで。

「ひやははっ、オマエの能力は透過能力だろうがア！ただ能力つかうだけじゃ、お仕事失敗つてなア。ひやははははっ！」

だが、ゴミ箱が車に直撃し爆発とはならなかった。

ゴトンと先ほどの威力を全部失ったように、ゴミ箱は坂田のめのみえで転がった。

「お仕事失敗になってたまるかよ。あと、能力はそんな感じだな。だが透過能力だけじゃ駄目なんだよ。他にも必要な能力

があるんだよ。たとえば、君みたいな化け物と遭遇した時とかに使う能力とかな」

坂田はそういうと、アクセラレータの方に向かって走り出した。

アクセラレータと坂田の戦闘が始まる

とある戦闘（後書き）

坂田強すぎ。

いったい何個能力使えるんだか・・・

気になりますね。

多分2つぐらいでしょうかな。

秋野みゆき（前書き）

今回は、エンパス？と美琴が接触します。

でわ、楽しんでください。

秋野みゆき

御坂美琴は常盤台中学の学生寮で、黒子のパソコンで調べ物をして
いた。

「なっ、なによこれッ!」

美琴が突然そんなことを言った理由は、あの変態さんの『お姉さま
』という

名のフォルダをみつけたからだ。

見つけたというか、どろどろとデスクトップの画面に置かれてあっ
た。

美琴はフォルダを開こうと思ったが、結果はわかりきっていること
なので

即ゴミ箱行きorゴミ箱を空にするで消去。

「はあ、いきなりこんなモノ見つけてしまうと、なんか調子くるっ
わねえ」

溜息をつきながら美琴はブラウザを開く。

そこには、さっき黒子の調べていたページが記録されていたのか
直で、そのページにつながった。

「ラッキー！パソコンに電撃流さなくて済んだわね」

そのページはジャックジメント専用のパスワードせいのページで、事件の情報などが満載に載っている。

当然一般人には観られてはいけないのだが・・・

黒子はページをそのまま記録してしまっていた。

だが、もし記録されてなくても美琴には意味ないだろう。

能力をつかって、ちょちょいのちょい・・・。

まあ、そういうことである。

そんな美琴は、『犯人写真』とかかれた一枚の写真にくぎ付けだった。

写真は、ブレが激しすぎて何が何だかよくわからないが、服装は白・白だった。

美琴は椅子の背もたれに背中を預けながら右手で頭をかく。

「はあ、こんなんじゃないじゃない。情報が少なすぎるっつーの！」

その時、部屋の入口が『ガチャッ』と音お立てながら勝手に開いた。

美琴はパソコンのブラウザをものすごい勢いで閉じて、扉のほうを

振り向く。

「ああ〜、黒子お疲れっ！合同かい……、ってアンタだれ！？」

美琴の視界に写っていたのは、黒子ではなく白い服で統一された服装をしている

美琴ぐらいの少女だった。

美琴の右手には、青い電撃がまとっていた。

「あつ、驚かせてすみません。あと自己紹介します。私は秋野みゆきと申します。

やっとあなたに会えました」

少女はにっこりしながら言ってきた。

美琴は、わけがわからなかった。

常盤台の学生寮はセキュリティ万全だ。なのにどうやってはいってきた？

用がある人がきたとしても、寮管からの連絡が来るはずだ。

だとしたら、テレポートなどの能力を使って入って来たとしたか考えられない。

あと、美琴は少女のことを知らない。

怪しすぎる。ただ会いに来た、遊びにきたは絶対にありえない。

だが、美琴に対して少女は丁寧に挨拶をしてきた。敵ではない……？

美琴は少女をにらみつけながら言う。

「アンタ、私に何の用？常盤台の寮はものすごくセキュリティーが固いんだけど」

みゆきはにっこり笑いながら返してきた。

「はい、知ってます。常盤台中学の事は調べてきましたから。ちょっと能力を使った

だけです。あと、あなたに伝えたいことがあります」

美琴は彼女の能力も気になったが、まずは伝えたいこととはなにかだ。

「まあ服装といい、いろいろと突っ込みたいところあるけど、伝えたいことって？」

「はい。あなたは、命を狙われています。だから、私はあなたを守ります」

現在時刻 午後7時

秋野みゆき（後書き）

どうでしたか？

次はいつぐらいに投稿しようか・・・

まだ決まってませんが、次回を楽しみにしてもらえば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9017k/>

とある未来の都市戦争

2010年10月9日17時32分発行